

シンポジウム

家族看護の実践は、どこまでできているか

— 家族のニーズに応えるために —

座長

原 礼子 (慶應義塾大学)

渡辺 裕子 (家族看護研究所)

我が国において、この10年間に家族看護への関心は大きく高まり、本学会における学術集会の歩みをみても、年々演題数が増加し、質的な充実がはかられています。特に実際の援助のプロセスを素材にした研究が増加しており、実践の場における家族看護実践の充実が伺われます。国際的にみても、本年、国際看護師協会 (ICN) では、「国際看護師の日」のテーマを「看護師：いつもあなたのために、あなたのそばに～家族のケア～」とし、家族へのケアを強化する方針を表明しており、今後家族看護実践を推進する流れは、止まることのない大きなパワーとなっていくと考えられます。

このような大いなる流れのなかで、改めて家族看護の実践がどこまでできているのか、その現状と課題を多くの参加者の方々と分かち合いたいと願い、本シンポジウムを企画しました。シンポジストの方々は、病院の看護師、大学教員、地域の保健師、医師という異なった立場で、さまざまな対象に対して家族へのケアを実践しておられます。各シンポジストの実践活動を提示していただくことによって、家族看護、家族ケアの多様性や拡がり共有でき、参加者一人ひとりに家族看護の新たな展望が拓かれていく、そのひとつのきっかけとなれば幸いです。

多くの方々との活発な意見交換を期待しています。